

傾向にあった。一方造影 CT は、単純 CT で不明の10例中7例を検出し有用である。また、CT 検出能に関する実験的検討を行った。その結果、肝癌の検出率の上昇には、線量を増加させ、スライス幅を狭め、スライス間隔を狭くとり、ウィンドウ幅を150前後に設定することが理想的であると思われた。

10. 肝細胞癌の病態と術後再発例の検討

山本 雅一

昭和54年から60年までの肝細胞癌切除165例のうち、明らかな遺残21症例、術後3カ月以内肝不全死23症例、経過不明9症例を除いた112症例を対象とし再発を検討した。再発は112例中57例に認め、その55例は残肝再発であった。再発の時期はその86%は2年以内であり、平均は1年から1年半であった。再発は腫瘍径、肉眼形態、非癌部肝組織、術式と関係を認めた。とくに、2cm未満の限局結節型腫瘍は再発率が低かった。肝硬変の合併から肝切除範囲が制限されるのが現状であり、正確な術前診断にて肝細胞癌の病態を把握し、病態に適した補助療法を付加することが大切である。

11. 各種画像診断法による原発性肝癌の病態診断

山口 峰生

原発性肝癌を高崎の臨床病態分類に従ってその予後を検討すると、限局結節型、結節増殖型、結節進展型、限局塊状型、塊状進展型の順で不良となる。従って肝癌の治療方針の決定にあたっては、画像診断での病態分類の正確な把握が重要となってくる。しかし94例の肝切除例を対象に今回各画像診断の正診能を検討してみると、その結果は必ずしも満足のゆくものではない。病態因子別に被膜、被膜外増殖、娘結節、門脈腫瘍塞栓の正診率についてみると各種画像診断の長所が明らかとなってきた。従って今後は小病変描出にはエコー、大きな病変についての外観の把握にはCTscan、門脈腫瘍塞栓の検出には血管造影といった各種画像診断の長所を組み合わせた形での総合的な画像診断による、より正確な病態把握が望まれる。

12. ヒト肝臓癌から見いだされた発癌遺伝子について

長原 光

ヒト肝臓癌から新しい発癌遺伝子を検出するべく、手術的に得られた組織から高分子DNAを抽出し、NIH3T3細胞へのトランスフェクションを試みた。

その結果、27例のヒト肝臓癌から3例の第2次トランスフォーマントが得られ、4例から第1次トランスフォーマントが得られた。ヒト特異的反復配列である

Alu 遺伝子をプローブとして、サザーンハイブリダイゼーションを行うとこれら7例中6例で同一のパターンを示した。他の1例のAlu 遺伝子の組込みのパターンは異なる。これらはras 遺伝子群、c-hst、c-raf1とはハイブリダイズせず新しい発癌遺伝子の可能性が高い。

13. lupus model としての MRL マウスにおける免疫異常の解析

長谷川 潔

ヒトの自己免疫疾患にはいくつかのモデル動物が存在する。例えばMRL-lpr マウスでは、ヒトSLEと同様腎障害、関節炎などが出現し、血清中に自己抗体が検出される。これらのマウスは遺伝学的に均一なため免疫学的解析に適し、これまでの研究成果はヒト自己免疫疾患の診断や治療に大きな貢献を果たした。我々はこれらモデル動物の免疫異常を解析する目的で、MRL-lpr マウスのリンパ球に対するモノクローナル抗体を樹立し、その性状を調べた。その中でALP-3抗体の認識するLP-3抗原はすべてのT細胞と活性化B細胞に存在するが、休止期B細胞には存在せず、また正常マウスに比べ自己免疫マウスB細胞に多く認められることがわかった。このことから、LP-3抗原が自己免疫マウスにおけるB細胞の抗体産生に何らかの関連を有していることが示唆された。

14. Interleukin-2による消化器担癌患者のLymphokine Activated Killer 活性誘導と臨床応用

次田 正

Recombinant interleukin 2 (rIL-2) を用いて、消化器癌患者のlymphokine activated killer細胞(LAK細胞)を誘導し、健常者と比較検討した。この結果にもとずいて原発性肝癌6例、転移性肝癌4例に対し、LAK細胞と、rIL-2の経動脈的投与によるadoptive immunotherapyを行った。治療成績は、原発性肝癌ではPRが1例、MRが2例、NCが3例、転移性肝癌ではすべてNCであった。本法は全身状態の不良な患者にも実施可能であり、重篤な副作用もなく、今後癌に対する有力な治療法になる可能性がある。また、さらに治療成績を向上させるためには、投与細胞数の検討や、他の治療法の併用なども必要と考えられた。

15. 巨大腫瘍を形成した虫垂炎術後放線菌症の1例 (社会保険山梨病院外科、*共同理)

手塚 秀夫・草野 佐・小沢 俊総・
久米川 啓・山下由起子・長谷川正治・
小俣 好作*

症例は37歳の女性，下腹部痛と腹満を主訴として来院。入院時所見では，臍部に皮膚の発赤を伴った圧痛を有する腫瘤を認め，血液生化学検査では，血清ALPの軽度上昇と白血球数22,000，血小板数64.4万を示した。CTにて腹壁下に腫瘤を，また注腸透視にて横行結腸に狭窄と辺縁不整を認めたため，悪性腫瘍を疑い手術施行したところ，組織学的検索で放線菌症と診断された。

抗生物質が多用される現在では放線菌症は稀な疾患であるが，最近われわれは巨大腫瘤をきたした回盲部放線菌症の症例を経験したので報告する。

16. 当院における最近15年間の消化器病症例の動向と検討

(川崎胃腸病院)

太田代安律・大森 尚文・今給黎和典・山内 大三・松尾 成久

最近の手術症例数の変遷上，大きな変化は，昭和58年以降のH₂ブロッカーの出現・普及に伴う胃良性疾患の手術例数の激減である。しかしながら，出血による緊急手術例は，減少傾向が鈍く，その胃良性疾患全体に対する%はむしろ増加している。最近，当院では出血例に対する内視鏡的止血を積極的に試みている。胃悪性疾患は，ここ数年間，絶対数・%共に横ばい状態で，全手術例の約20～30%を占める。大腸疾患はほとんどが悪性疾患であり，全手術例の約10%を占め，その70～75%が下部大腸である。胆道・膵疾患は経時的変化に一定の傾向がなく，全手術例の約30%を占める。平均寿命の高齢化にともない，70歳以上の高齢者症例も，全手術例の約10%を占め，大学病院の傾向同様，高齢者を扱う機会が今後増えていくことが示唆される。

17. 胸部食道癌拡大郭清後の反回神経麻痺

(都立駒込病院外科)

室井 正彦・吉田 操・岩塚 迪雄

我々は食道癌手術の根治性を向上させるべく，リンパ節の拡大郭清に努めている。

胸部食道癌に対するリンパ節拡大郭清は再発が12%，全て血行性転移で局所再発のないことから，よい適応と考えられた。しかしこれに伴い反回神経麻痺が48%と高頻度に合併し，その原因としては，術中損傷とともにCUSAの使用によるところが大きいと考えられた。

両側反回神経麻痺による呼吸困難は術後管理上の工夫で対応でき，時間の経過と共に代償性に改善する。

麻痺は長期にわたり残存するため，退院後も，癌を対象にした追跡だけでなく，誤嚥や，これによる気管支炎に対しても注意する必要がある。

18. 咽喉頭異常感の電子内視鏡的検討

(東京女子医科大学第二病院中央検査科)

片山 修・市岡 四象・長谷川みち代・亀井 文恵・増田美知子・藤林真理子

対象は1985年8月から1986年10月までに当院内視鏡室で，咽喉頭に異物感，つかえ感などを訴えて下咽頭・喉頭を含む上部消化管内視鏡検査を施行した100例である。使用器種はWelch Allyn社製Video Endoscope VE81105 97回，同社製の9.5mm Video Gastroscope VE81205 12回，オリンパス光学工業製Video Image Endoscope GIF-V10 4回および東芝一町田製TV-Endoscope TGS50D 1回である。

診断できた下咽頭病変は，舌扁桃肥大4例，粘膜下腫瘍2例，下咽頭癌1例などで，食道病変では，裂孔ヘルニア10例，食道潰瘍3例，食道癌2例などであり，いずれも優れた画像としてとらえることができた。

19. 昭和60年度の検診で発見された胃癌33例の検討

(社会保険山梨病院内科)

佐藤 秀一・久米川重子・広瀬 寿文・小沢みや子・中沢 肇・田辺 誠・井口 幸伯・飯田 龍一

(同外科) 草野 佐

(同病理) 小俣 好作

昭和60年4月1日から昭和61年3月31日までの1年間に社会保険山梨病院健康管理センターで施行した検診で発見された胃癌33例について検討した。胃癌発見率は，14,792例中33例(0.22%)であった。X線検査を第1選択した症例のうち発見された胃癌の頻度は8,379例中11例(0.13%)であり，内視鏡検査を第1選択した症例のうち発見された胃癌の頻度は，6,413例中22例(0.34%)であった。早期癌についてみると，X線検査では4例(0.05%)であり，内視鏡検査では21例(0.27%)であった。

20. 上部胃癌の形態学的検討一周囲粘膜ならびに深部浸潤様式との関連において

(金沢大学がん研究所病院外科部)

荻野 知巳・磨伊 正義

金沢大学がん研究所外科において，過去に切除しえた791例の胃癌症例中の約3.9%，31例で噴門部癌を経験したが，今回，癌の宿主たる周囲粘膜の腸上皮化生と癌腫形態，臨床病理学的態度の間に相関がみられた